

佐賀県研究成果情報（作成 2021年2月）

[情報名] 被覆栽培茶の安定生産のための秋整枝位置は浅刈り面より3節上が良い

[要約] 被覆栽培茶園において、秋整枝位置を二番茶後浅刈り面から3節上とすることで、秋冬季の秋芽表層葉の光合成能力が向上する。また、翌年の一・二番茶収量が増えるとともに、全窒素含量も増加し、品質が向上する。

[キーワード] 茶、被覆、樹勢、秋整枝、秋芽、光合成能力

[担当] 佐賀県茶業試験場 茶樹研究担当

[連絡先] TEL:0954-42-0066 メールアドレス: chagyoushiken@pref.saga.lg.jp

[分類] 普及

[部会名] 茶業専門部会

[専門] 栽培

[背景・ねらい]

近年、高品質茶生産のため、被覆栽培が広く行われているが、被覆期間の長期化や二番茶被覆茶園の増加により樹勢の低下や収量の減少が顕在化している。被覆栽培でも安定して生産ができる栽培法を確立するため、母葉となる秋芽の形質に大きく関与する秋整枝位置が翌年の収量・品質に及ぼす影響を明らかにする。

[成果の内容]

1. 秋冬季の秋芽表層葉の光合成能力は、秋整枝位置を二番茶後浅刈り面から3節上にする
と2節上、4節上より高くなる（図2）。
2. 翌年の一番茶収量は、3節上が2、4節上より増加する。二番茶収量は、3、4節上とも
に2節上より増加する。（表1）。
3. 一番茶の品質は、3節上の全窒素含量は2節上より高く、繊維含量が低いことから品質
が向上する。二番茶の品質は、3節上の全窒素含量と繊維含量は2節上とほぼ同等である
（表1）。
4. 以上の結果から、秋整枝位置を二番茶浅刈り面から3節上とすることで、秋芽表層葉の
光合成能力が向上し、翌年の一・二番茶の収量が増加し、品質が向上する。

[成果の活用面・留意点]

1. 被覆栽培茶園の秋整枝に活用できる。
2. 試験は、品種「やぶきた」で、樹齢は圃場Aが17年生、圃場Bが47年生の一・二番茶
期に10年以上連年被覆している2圃場を供試した。
3. 気象条件などにより、年ごとに秋芽の伸長程度が異なることから、それを考慮したうえ
で二番茶浅刈り面から3節上となるように秋整枝の高さを決定する必要がある。
4. 本技術は、樹高が高くなりやすいため、中切り更新から次の更新（4あるいは5年間隔）
までに1回ないし2回実施することが望ましい。

[具体的なデータ]

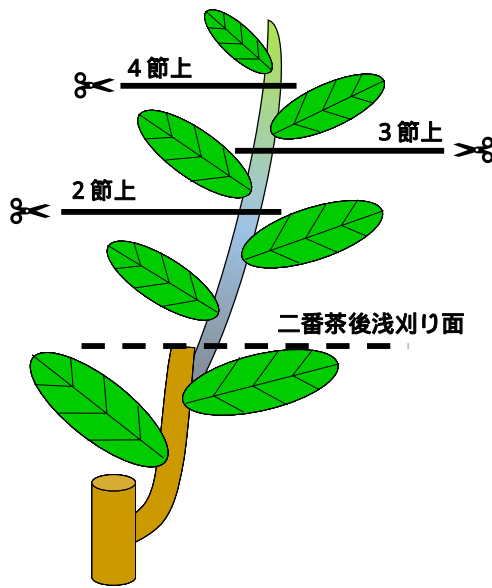


図1 秋整枝位置

1) 秋整枝を二番茶後浅刈り面から2節上、3節上および4節上で実施。

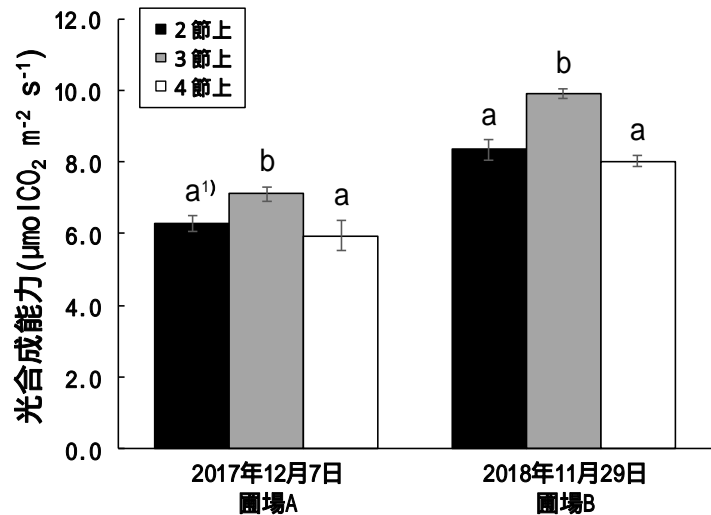


図2 秋整枝位置の違いが秋冬季の秋芽表層葉の光合成能力に及ぼす影響 (n=5)

1) 異符号間には5%水準で有意差あり(Tukey-Kramer法)。

2) 秋芽の伸長程度を考慮し、2017年は2節上区で二番茶後浅刈り面より6cm、3節上区で8cm、4節上区で10cm、2018年は2節上区で7cm、3節上区で10cm、4節上区で13cmの位置で秋整枝を行った。

表1 秋整枝位置の違いが翌年の一・二番茶の収量・品質に及ぼす影響

茶期	整枝位置	2018年(圃場A)					2019年(圃場B)				
		収量 (kg/10a)	百芽重 (g)	新芽数 (本/m ²)	全窒素 (乾物%)	繊維 ³⁾ (乾物%)	収量 (kg/10a)	百芽重 (g)	新芽数 (本/m ²)	全窒素 (乾物%)	繊維 (乾物%)
一番茶	2節上	402 (100) ¹⁾	70.8 a ²⁾	1283 a	6.0 a	19.0 a	426 (100)	71.9 ²⁾	900 a	6.1	19.2
	3節上	409 (102)	75.2 a	967 b	6.3 b	18.6 a	480 (113)	73.3 n.s.	1150 b	6.2 n.s.	18.3 n.s.
	4節上	350 (87)	78.6 b	892 b	5.5 a	21.1 b	303 (71)	75.9	925 a	6.2	18.3
二番茶	2節上	547 (100)	66.5 a	1250	4.3 a	26.1	341 (100)	65.7	1156	4.8	24.0
	3節上	581 (106)	69.1 a	1292 n.s.	4.3 a	26.4 n.s.	561 (165)	74.9 n.s.	1400 n.s.	5.0 n.s.	24.1 n.s.
	4節上	612 (112)	89.3 b	1100	4.0 b	27.5	489 (143)	74.5	1350	4.8	25.6

1) 括弧内の数値は、2節上区を100としたときの指数を示す。

2) 異符号間には5%水準で有意差あり、n.s.は有意差なし(Tukey-Kramer法)。

3) 中性デタージェント繊維(灰分含む)。

4) 試験規模は各区90m²(50×1.8m、反復なし)。

5) 被覆はバロンスクリーン(遮光率70%、#1000A)を用いて、一番茶では9~10日、二番茶では7~9日直接被覆した。

6) 2018、2019年とも各区の出開度を揃えるために4節上区の摘採日(+1日)を調整した。

[その他]

研究課題名：連年被覆が茶樹に与える影響解明および持続的なかぶせ茶生産技術の開発

予算区分：県単

研究期間：2017-2019年度

研究担当者：平野剛史、野村幸代、東島敏彦、山口史子

発表論文：